The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	センター長は猛獣使い？
Author(s)	大橋, 一友
Citation	GLOCOLブックレット. 2016, 18, p. 26-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55587
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

1-4
センター長は猛獣使い？

大橋一友　大阪大学大学院医学系研究科・保健学専攻教授

聞き手―**島薗洋介**

視野の広がりが生んだ共同研究

――　大橋先生は2011年8月26日から2014年3月31日まで、栗本先生に引き継いでGLOCOLの3代目のセンター長をつとめられました。大橋先生は、どういったかたちでGLOCOLに関わられていたのか、またセンター長に就任された経緯について、まずはお聞かせいただければと思います。

大橋　保健学科の大橋です。3代目のセンター長として2年8ヶ月ほどつとめさせていただきました。最初に兼任になりましたのは2010年で、その際にGLOCOLのセンター会議のメンバーとして活動を開始させていただきました。2011年度の8月の前に栗本先生が4年間の任期を終えられるということで、センター長に就任してもらえないかということを担当理事からお話をいただき、快諾をさせていただきました。それまでのGLOCOLが文系主体の活動が多かったので、GLOCOLの大きなミッションの一つであります、いまとなっては言葉が古いですが、「文理融合」というところの「理」の考え方をGLOCOLに入れてほしいということで、就任を依頼されたという経緯がありました。

――　文系主体であるセンターに理系の考え方を入れることが、先生がセンター長に就任されたときのミッションの一つがだったということですが、この点について、先生が意識なさったこと、あるいは難しさを感じたところはあるのでしょうか。

大橋　私が来る前に理系とのつながりがなかったというわけではありません。センター長になったときに実は保健学科長をやっており、保健学科からは兼任教員がすでに5名おり、その一人である牧本教授は、住村先生と一緒に東アジアの高齢化についての研究等を企画されていました。グローバル環境につきましては、GLOCOL開設当時から磯先生が中心になってさまざまな活動をされており、私どもの保健学科の卒業生も、磯先生の教室に、大学院に進学するなど、お世話になっていました。その後、私が就任時に保健学科の山本教授――現大阪府の公衆衛生研究所の所長です――がSATREPS［Science and Technology Research Partnership for Sustainable Development　地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム］のベトナムにおける薬剤耐性菌の研究を住村先生と進められました。これは現在もつづいています。

しかし、やはり所属している先生方のバックグラウンドが文系にシフトしているということで、何らかの理系の考え方を持ち込めないかというご依頼だったと思います。ただ、あえて理系ということをいれるのではなくて、上手に今あるGLOCOLのリソースをもう少し幅広い目で見て、いろいろなところに展開していけたらよいと考えていましたから、あえて異分子をGLOCOLに入れるということはあまりしませんでした。そのほうが、活動が活性化すると考えておりました。その結果として、SATREPSをはじめとしたさまざまな共同研究――SATREPSにはもちろん現在のセンター長であります平田センター長も当初から深くコミットされていますが――では、よい成果がでてきたのだと思っています。私が特別何かするよりも、何か入ったことでみなさんが視野を広くもたれたのではないかというふうな感じはしています。

――　ちょうどGLOCOLのセンター長に就任されていたときには保健学科の学科長も務められいたということで、GLOCOLのような組織は普通の部局とはまた違った側面もあると思うのですけれども、そういった部分に関してはいかがでしょうか。

大橋　正直、最初センター長になりましたときに、GLOCOLのなかの組織体というのがどのようになっているのかをつかむのに時間がかかりました。通常部局とは違う運営管理方法になっていますので、そのあたりを理解するのに正直戸惑った点もあります。

とくに戸惑ったのは、仕事が重なることです。全員が出動体制というのはいいのですけれども、一歩外から見ると誰がどういう仕事をしているのかがまったく見えてこない。ということで、1年目にやらせていただいたのは、3つのグループ［国際協力グループ、グローバル共生グループ、FIELDO］を分け、役割を整理したことです。この点につきましては外から見ても、わかりやすくなったと思います。

一方で、もともと運営というものを班体制というものでGLOCOLはやっていたのですが、私自身は、班というものが責任の所在がはっきりしないという感じがありました。そこで少し、委員会とか責任者とかそういった

ものをはっきりさせたいということで、就任いたしました次の年度に組織替えをやりました。結局これはまずいことをしたと、現在では反省しています。このような小さな部局であって、かつ専任教員が少ない、特任教員が多いという状況を考えると、通常部局のやり方というのがあまり適用されない、もしくは適用しても機能しないということがわかりました。そこで次の年にはもともとの班体制に戻して、現在わりとこれがうまく機能しているのではないかと思います。私が就任するまで4年間強先生方がいろいろな工夫されたところを若干さわって、その時点では周りの先生に混乱を招いたこともあるのですが、そういった試行錯誤のなかから、現時点ではわりと順調な運営ができているのではと思っております。

学生の将来に多様性をもたせる

――　大橋先生がセンター長を務めておられたときに大きな進展をみせたのは、フィールドスタディ、インターンシップのプログラムに関するリスク管理に対する取り組みだと思います。どのようなことをお考えになりながらリスク管理に取り組まれたのか教えていただければと思います。

大橋　私が着任したときに、ちょうどFIELDOを中心におこなっていますフィールドスタディならびにインターンシップの本格実施が開始しました。その際に一番私として気になりましたのがリスク管理のことでした。私自身、バックグラウンドが産婦人科の医師ですので、病院のなかでも常にハイリスクの診療をやっておりました。そのなかでわれわれはどうしても先を暗く見て、できるだけの手を打っておこうというような考え方をして、日々診療にあたっているわけです。

けれども、GLOCOLでは、先生方が海外へ学生さんを送るときに、自分の成功体験をもとに「学生もこれくらいできるだろう」と、われわれからみると若干楽観的な予想のもとに学生さんの送り出しをやっていることもありました。さらには学生さんにそういった情報を伝えるということもなかなか確立しておらず、学生さんもあまり知識のない状態で海外に行っているというふうに見受けました。プログラムの内容については、GLOCOLの先生方のこれまでの実践、これまでの研究というものに裏付けされた教育効果等も含めた立派な授業にはなっていたのですが、反面、少しリスク管理がおろそかになっているのではないかと。

これは別にGLOCOLの海外プログラムだけではなくて、世の中一般のプログラム全てに通じるのではないかということで、FIELDOのメンバーを中心に今回科研で研究をしてみようということで、一定の成果があげられたものだと思っています。ただこれはGLOCOLが保有すべきものではなくて、まずは大阪大学が保有し、さらにはこういった知見知識を日本全体で保有していく必要があります。そこで、今回1月に東京でセミナーを開くことになりました。全国北海道から沖縄まで全ての都道府県から大学関係者ならびにそれ以外の方も約100名の参加していただけるようですので、こうした試みが評価されているのだと思います。

――　GLOCOLは保健学科の先生方も何人か兼任教員を努められています。また保健学科と連携してグローバル健康環境・高度副プログラム等を運営しています。大橋先生は、保健学科で、たくさんの学生、大学院生の方を指導されていると思うのですけれども、例えば保健学科の学生に対してGLOCOLが提供するような高度教養プログラム、もしくは海外体験型教育プログラムの意義について、どのようなお考えをもっていらっしゃるのでしょうか。

大橋　以前から、保健学科からGLOCOLプログラムには多数の学生が参加させていただいて、それぞれ自分たちの将来を考えるきっかけになっていると考えていました。保健学科には、将来の目的を狭く考えている学生が多いのです。GLOCOLのプログラムを通じてもう少し自分の可能性があるのではないかということで、いろいろな道につくという学生もでています。私は看護学専攻に属していますので、通常、学生は看護師、保健師、助産師に一般的にはなるわけですが、海外でいろいろな活動をしていきたい、そのためにはどういうキャリアをつめばいいのかということで、例えば一般企業や航空会社に就職するだとか、大学教員としても海外の大学の教員を目指しているとか、そういった卒業生が保健学科からもでています。将来に多様性をもたせるという意味でGLOCOLの活動は大きな意義をもっていると思います。

教員は猛獣であれ

――　では最後の質問です。GLOCOLの9年間の活動をふまえまして、今後のグローバル化時代における大学のあり方、大阪大学のあり方、あるいは日本の大学一般のあり方について、GLOCOLの9年間の経験からどのような教訓が引き出せるのか、また、大橋先生がGLOCOLに関わってこられた経験から何かご提言がありましたらそういったことについて教えていただきたいと思います。

大橋　私がセンター長をつとめさせていただいた3年弱は、実はGLOCOLの黄金期といいますか、予算もまだ十分にあっていろいろな活動ができて、

みんなが夢をもっていた時代でした。いい時期にセンター長をやらせていただいたと思っています。

こういったセンターでまず一番大事なことは、そこにいる教員が、教育だけではなくて、優れた実践能力、もしくは優れた研究能力がないといけない。そうでないと、特にグローバル人材を養成する教育はできないということを実感しています。もちろんGLOCOLの一番大きなミッションは教育というところがあったのですが、われわれは研究と実践を組み合わせて教育をやっていくのだということを全面に打ち出してやってきました。教育だけをするというようなセンターというのでは、グローバル人材を養成することはまったく無理であろうというふうに考えています。

特にこういった通常部局ではないセンターというのは、やはり非常にとんがった、どこかすごく優れている、でもちょっとバランスが悪いかもしれないというような教員をどんどん採用していく、そうした教員をいかして新たな教育をつくっていくということが非常に重要です。実は私がセンター長の頃によく外部の方に「GLOCOLはどういうセンターですか」ときかれますと、そのときによく答えていたのが「猛獣使い」ですと答えていました（笑）。教員は猛獣でないといけないと思っております。飼いならされた家畜ではやはり困るわけで、そういった人をどうやってちゃんと仕事をしていただくのかというのは難しいのですが、それもまたセンター長の醍醐味というふうに感じておりました。そういった人材を仕事ができるようにするのが大学の奥深さであろうし、大阪大学であればそれが可能であると思っておりますので、あまり言葉が悪いかもしれませんがまとまった教員というのはあまり私としてはこういったセンターにはふさわしくないし、いわゆるグローバル人材を養成するという部分では難しいのではないかと。

そのためにもぜひ今後とも大阪大学ならびに日本のそれぞれの大学ではこういった今回GLOCOLでやってきた経験というのを残していただいて、こういったちょっととんがった教員というのを集団にしていただいて、そしてどこかに新しいものに挑戦していくようなセンターを今後もつくっていただきたいと思います。ただ、これには当然先ほどいいましたように、なかなか猛獣はどこに発進するのかわかりませんので、管理をするという部分もしっかり作って、どこかに行き着きそうになったら止めるということも必要でしょう。基本的には夢に向かって突き進んでいくという教員があって、そのあと学生がうまれてきますので、そのあたりを今後も見守っていきたいと思っています。